

日本語の
「歯とことわざ」

大庭 健

目次

はじめに

歯が生えて生まるる子は鬼子

女の歯三十三枚揃う時は蛇身になる

奥歯に剣

前歯のすいている者は親に早く別れる

嘘を言うと嘘歯が生える

反っ歯に餅見せな

男は色黒く歯白し

唐茄子にお歯黒

雷の落ちた樹の皮は虫歯の薬

虫歯の痛むときには紙に塩を包んで噛み、それを馬屋の柱に釘づけにすると良くなる

梅干しの種を囲炉裏に捨てると歯が痛くなる

歯が痛むときは桃の木を噛むとよい

人の楊枝を使うと歯くさを病む

歯の抜けた夢は不吉

上歯抜けたら堀の底に棄てよ、下歯抜けたら屋根の上へ投げよ

櫛の歯欠くれば子に別るる

櫛の歯を挽くが如し

牙を噛んで日を送る

鰻の歯軋り

切歯慷慨

神馬の食べた豆を食べると歯ぎしりが治る

歯の根を鳴らす

歯を切る

唇竭きて齒寒し
鬼の牙にも当たってみろ
牙あるものには角無し
牛の齒を拾うと金持ちになる
一黒陸頭耳小齒違う
犬の齒に蚤当たり
白い齒を見せぬ
白い齒を見せる
齒に衣着せぬ
齒に血を付ける
泣血三年、未だ嘗て齒を見わさず
目には目を、齒には齒を
下駄を畳の上で履くと齒が欠ける
人を噛む犬は齒を見せない
齒亡び舌存す
齒と齒
恥の名かくに爪ついで勘当被るに齒欠けず
明眸皓齒
瑞齒含む
齒が利く
飯のあらと嫁のあらは少しでも齒にかかる
六月一日に齒固めとして鏡餅を食べる
齒なしの大蛸
齒節がたたん
下齒を入れる
齡傾く
齒を没す
おわりに

はじめに

昔、わが国では、ことわざは生活に根ざした知恵として広く使われていた。ことわざが庶民となじみ深かったためか、俗な言葉として軽蔑ぞくげんされることもあった。ことわざが「俗諺」や「俚諺」などと言われるのは、そのためである。

俗諺は「世間で普通に言うことわざ」と定義されている。俚諺もごく一般に使われることわざであるが、少し卑しい感があるのは否めない。

ことわざは昔、上流階級では受け入れられず、平安朝のような貴族社会では使われることはなかった。平安中期に書かれた清少納言の『枕草子』の中で、藏人が俗世間で使われていた俚諺を用いたため、女房達の嘲笑を買ったくだりがある。

同じく平安中期の文学作品である紫式部の『源氏物語』五十四帳の中にも、ことわざは出て来ないと言う。ことわざらしきものがあるとしても、それは当時の漢の国の故事くらいであるとされている。

平安末期になると、『今昔物語集』のような民間の風俗や人情などを語った説話が現れ、俚諺が散見されるようになる。

平安時代が過ぎると、文学は大衆に浸透し、文学とことわざのかかわりが深くなって行く。鎌倉時代から室町時代、さらには江戸時代になると、俗諺は普通に使われるようになる。

ことわざは学者や賢人が書き残した教訓や格言でないのがよい。ことわざは無名の苦勞人が日常生活の中で得た知恵を言葉に託したものである。

今はことわざで世人の情意を投合するのは古めかしくて難しい。しかし、浮世離れたことわざには、味わい深い心情が込められていることに気付くのは今も昔も変わりはない。

ことわざの中には、歯を感情表現の身体言語として用いたものが少なからずある。歯に関心を持つものにとっては興味ある事象である。

歯は一生に二度も生える。歯が乳歯と永久歯に区別されるのも特異的と言ってよい。歯以外の臓器や器官で小児と大人に分けられるものはない。歯はいったん生えると大きさは変わらない。大きくも、小さくもならない。他の臓器や器官は身体の成長・発育と共に大きくなる。成長しきった臓器や器官は加齢により萎縮もする。

歯は体を構成する組織の中で最も白くて、最も固いというのも特異的と言ってよからう。歯がことわざに出て来る主な理由は、歯の白さや固さだけにあるのではない。歯が抜け落ちることにも訳がありそうだ。他の臓器や器官は加齢に伴い萎縮して小さくなることはあっても、消え失せることはない。

わが国の歯にまつわることわざの中に、不吉な予感の譬えになるものがあるのは、歯が抜

け落ちることと決して無関係ではなからう。

人口に膾炙^{かいしゃ}していたことわざであっても、今はその伝達力を失いつつある。一方では、小さな器官の歯が今もなお、ことわざで存在感を示すのは、歯には特別な力が備わっていると考えからであろう。

古の人が歯の意をもつて語り継いだことわざが、今の世でも少しでも多くの人間に味わいを与えることが出来ればよいかと願っている。

なお、ことわざの多くは種本として、小学館の『ことわざ大辞典』を使用させていただいたことを申し述べさせて頂く。

歯が生えて生まるる子は鬼子^{こおにこ}

“歯が生えてうまるるは鬼子”も、同じ意の俚諺。

「歯が生えて生まるる子」は「先天性歯」のある新生児。

先天性歯は生まれたときすでに乳歯か過剰歯が生えていることを言う。先天性歯は上、下顎ともに前歯部にあることが多い。

過剰歯は定まった数より多い歯を言う。

先天性歯があると、嬰兒は授乳時に母親の乳首を噛む。歯があるから痛い。愛しいわが子であっても、乳房を噛む子は母親にとっては鬼のような子に見えたに違いない。

生まれ落ちたわが子に先天性歯があるのは困ったことだが、いつまでも歯が生えて来ないのも悩みの種である。

“歯の生えない子に山芋を食べさせると歯が生えない”と言う俚諺がある。

歯の萌出と山芋にどのような因果関係があるのか分からない。山芋をとろろ汁にしてご飯にかけて食べると、よく噛まなくて済む。丸呑みできる。しっかり咀嚼しなければ顎に力が伝わらず、歯の萌出に必要な適度な刺激が得られない。

「御歯の生え出づるに食い当てむとて、筍^{たかうな}をつと握り持ちて」(『源氏物語』横笛)とあるように、昔は歯が生え始めると、筍のような固い食べ物を幼児に握らせた。たとえ高貴な若君であっても、丈夫な歯を授かるためには行儀・作法など考えていられない。

美しく整った歯並びにするには、まずは頑丈な顎をこしらえなければならぬ。きやしやな顎では均整の取れた歯並びにならない。

固い食べ物がなければどうすればよいか。おしやぶりを噛ませればよい。おしやぶりは歯と顎を強くする知恵の塊と言ってよからう。

「未だ歯も生ゑねエ」は、寛政（一七八九―一八〇二）の頃、江戸深川の岡場所ではやった言葉。青二才の譬えである。岡場所は官許の吉原以外の私娼街の称。

青二才に生えていないのは智歯。智歯が萌出すると分別のある大人に成長したと見做された。今なら二十歳前後の年頃を言うのであろう。

英語では良識のある大人になることを“Cut one's wisdom teeth.”と言う。智歯が生えるのは大人の象徴である。

歯が早く生えようが、遅く出ようが、子供はいつも無邪気である。智歯となると、さらに先の話。

嬰兒にとつての智歯は、さらに、更に先の歯と言ってよからう。

女の歯三十三枚揃う時は蛇身になる

ヒトの永久歯は智歯を含めて三十二本あるのが普通である。昔は成人の歯が三十三本あるのは、あり得ないことと思つたのであろう。

歯を葉になぞらえて一枚、二枚と数えたのも昔ならでのことである。

「又神明に依て信施を受ける輩は、多分に蛇身を受べし」は『仮名法語集』にあるくだり。

僧は信者の施物を受けると蛇身に生まれ変わるが、女は歯が一本多いだけで蛇身になるというのか。蛇身になるのは畜生に生まれ変わることにはかならない。女が蛇身になるとはひどいことを言つたものだ。

歯が余分にあるのは過剰歯。あり得ない歯ではない。過剰歯の多くは顎の中に埋まつており、肉眼で見ることが出来ない。昔は過剰歯も他の歯と同じように、歯茎から出ていたのであろう。

先のことわざは、江戸時代の後期（一八〇〇年代）に出た『合巻』に見られるのが興味深い。合巻は『草双紙』の一種で、教訓・怪談・情話・古典の翻案などが盛り込まれた大衆の読みものである。

今の人間の永久歯が智歯を入れて三十二本すべて生え揃うのは珍しい。智歯は特に顎の中に埋まりやすく、智歯があるかないかはエックス線検査をしなければ分からない。レントゲン博士がエックス線を発見したのは明治二十八年（一八九五）のことであり、それまでは顎の中の歯の有無をエックス線で確認することは出来なかった。

ことわざを頼りに昔の人の歯の数を考えると、江戸時代には、智歯を含めて三十二本ある歯のすべてが歯茎から出ていたことになる。

昔は外国でも、ヒトの歯は三十二本生え揃うのが当たり前とされていた。タジキスタンのことわざに“ことばは三十二本の歯から出て、三十二の口に入る”と言うのがある。人の口から出た言葉は、あつという間に広がると言う譬えである。

それよりも何よりも、歯の数を「三十二本」と言い切っているのが素晴らしい。

洋の東西を問わず、昔の人の永久歯は三十二本すべて目で確かめることが出来たのは特筆に値する。

奥歯に剣くさね

腹の中で敵意を持っていた、そのことを表にあらわさないと言う譬え。

「御殿でなくばと奥歯に剣、はた簾はこやつと睨にらみし眼」『浄瑠璃』源平布引瀧。

「簾」は源氏に伝わる白簾。「睨みし眼」は平清盛の目を言う。

奥歯であれば殺意とも言うべき剣を携えていても露見することはない。前歯に剣ではさまにならない。腹中の敵意はすぐに見破られてしまう。

「奥歯を噛む」と言う譬えがある。歯を食いしばり、悔しさや、苦しみに堪えるさまを言う。

「お柳は奥歯をかみしめて、難きを隠し」『人情本』英対暖話―四―は、悔しさに堪え忍ぶ女の姿。

“親の奥歯で噛む子は他人が前歯で噛む”と言うことわざがある。

「親の奥歯で噛む」は親の後ろ楯で生きることを行い、「他人が前歯で噛む」は、世間が厳しく批判することの譬え。

親がわが子を甘やかして育てるとわがままな子になり、いずれは他人から非難されると言っている。甘やかす奥歯は見えなくても、非難する前歯はよく見えるから皮肉である。

奥歯には「奥歯に衣を着せる」や、「奥歯に物が挟まる」などと言ったことわざもある。物事をはっきり言わないことの譬えに、奥歯が用いられるのは興味深い。

「こう奥歯にものはさまったどっちつかずの殺し文句」『人情本』春色梅児譽美―後―
と言うくだりがある。思わせぶった言葉は不気味であり、暗い口の中にある奥歯の姿によく似ている。

不気味と言えば、「奥歯で笑う」という言葉ほど不気味なものはない。秘め事があるかのようにひそかに笑われると、気の弱い人間の心は痛む。笑うなら歯をあらわにして笑ってほしいものだ。

奥歯は前歯と違い、口を大きく開けなければ見えない。見えたとしても口の奥の暗い所で半身に構えている。奥歯が剣のように険しい顔をしていても、表情を見抜くのは難しい。奥歯は正体を見せない曲者と言ってよからう。

言葉としての奥歯も明瞭性に乏しい。奥歯が得体の知れないものの譬えになるのは当然のことかもしれない。

前歯のすいている者は親に早く別れる

俗説とは言え、重い言葉である。

前歯に隙間があると親子の縁が薄いと言っている。

死に別れを意味しているのであろう。

上の前歯がすいているのを正中離開と言う。原因は正中過剰歯による場合が多い。

正中過剰歯は左右の中切歯の間にある余分な歯を言う。過剰歯のほとんどは顎の中に埋まっているので、肉眼で見えることは出来ない。

歯に隙間があると何かと分が悪い。俗諺であるが、“歯の間の透ける者は運が悪い”や、“歯の間の透ける者は嘘をつく”などと言った言葉がある。

前歯の中でも、上の前歯を特に「門歯」と言う。門歯は家の門構えになぞらえての称であろう。やはり歯も見てくれがよいに越したことはない。隙間のある前歯が忌まわしく思われなくても仕方がない。

昔は上の前歯を「向歯」、向歯、「ぬか歯」などと言っているのが興味深い。

「七十餘歳をすぎて物見るには眼がねを掛け向歯まばらにして蛸の風味を忘れ、かうの物さえ細におろさせ、世に楽しみなき朝夕をおくり、ましてや色の道ふんどしかきながら女中同前の男、心のうき立つ程大口いうより外なし」『好色一代女』國主艶妾。

前歯が欠けると蛸を味わうことも出来ないし、漬物も細かく刻まなければ食べられないと嘆いている。

前歯は審美的に大切であるだけでなく、機能的にも大事な歯である。前歯を失うと物が噛み切れないだけでなく、発音もままならなくなる。前歯がすいていても噛むことに支障はない。しゃべるとき歯の隙間から空気が漏れるかもしれないが、歯があるだけでもありがたく思うべし。

前歯がすいていても嘆くことはない。“所変われば品変わる”という言葉があるように、よいこともあるから安心する。

「二枚の門歯―但し上顎部に限る、―の間にほんのかすかな隙間のあるのを、亜刺比亜人^{アラビア}は美しいと感ずるのである」『蓼喰う虫』谷崎潤一郎。

前歯がすいているのも捨てたものではない。美しいとする国があるからホッとする。親子の縁が薄いなど、微塵も感じられない。

嘘を言うと嘘歯が生える

嘘歯^{うそは}は普通の歯列からはずれて生えている歯を言う。特に上顎犬歯が唇側転位し、しかも低位にある状態。一般には鬼歯あるいは八重歯と呼んでいる。

「唇側転位」は、歯が歯列より外側に位置するのが特徴。

「低位」は、歯が歯列より上方に位置し、歯を噛み合わせたとき下の歯に接触しない状態を言う。

嘘歯であつても、鬼歯と八重歯の称では人に与える印象は天と地ほど違う。

鬼歯は文字どおり、鬼の歯を想像させる。鬼は怖いので、嘘をつくとき鬼のような歯が生えると言って、子供の虚言を戒めたのであろう。

八重歯は歯が八枚重なっているのではない。歯と歯の重なりを誇張して言ったのである。実際には上顎犬歯が側切歯と第一小臼歯に重なった状態を言う。

昔、八重歯は可愛い女の歯並びの象徴だった。

「何か表情をすると矢張り美しかった。笑う時八重歯の見えるのが妙に誘惑的だった」『暗夜行路』志賀直哉）や、「色の白い、八重歯のある子でした」『人間失格』太宰治）などとあるように、八重歯は可愛い女性の歯並びとして描写されている。

「物言う時歯並びの好い、瓢^{ひょう}の種のような歯の間から舌を動かすのが一際愛くるしく見られた」『つゆのあとさき』永井荷風）も可愛い女の口元の描写である。

八重歯が小さな嘘をつく小悪魔の可愛らしさを表すのであれば、整然と整った美しい歯並びは、成熟した女の美しさを感じさせるかもしれない。

八重歯が可愛いと言ったのは遠い昔のことである。おそらく、江戸末期の不整美崇拜の不健全な悪趣味が、歯並びにも影響を与えていたものと考えられる。

今は整った歯並びに関心を持つものが多い。わが子の八重歯を心底可愛いと思うのんきな親はいないであろう。

反^そっ歯に餅見せな

反っ歯は上顎全体が前に突出しているのではない。上の前歯だけが普通より前に出ている歯列を言う。いわゆる「出っ歯」である。

反っ歯の人の前歯が餅を食べるのに便利がよさそうに見えるので、そのような人に餅を見せるなど言っている。

相手に餅をたくさん食べられると、当然のことながらこちらは損をする。自分の損失を少なくするためには、相手が得意とすることは避けたほうがよいと言う譬え。

“反っ歯は餅を好^すく”や、“反っ歯の西瓜^{すいか}食い”なども、反っ歯を警戒するとき用いることわざ。

「鼻^{はな}が仰向^{あをむい}て二階^{にかい}がきな臭^{くさ}いといふ。歯は返^{そつ}歯^はで椽^{えん}の下^{した}を覗^{のぞ}うとする。口^{くち}はかゝつ居^てて鉄棒^{かねぼう}ひいても、耳^{みみ}は遠^{とほ}いくだ」『浮世風呂』――二。

右は子守が反っ歯の乳母をなぶって言ったくだり。

乳母は子供の頃、抜けた上の前歯を縁の下に放り投げ、鼠の歯のように丈夫な歯に替えてくれと願った。ところが反っ歯になってしまった。そのため、大人になった今でも縁の下が気になり、つい覗いてしまう。

反っ歯は室町時代から目立つようになつたと言われている。葛飾北斎の描いた江戸町人の顔に反っ歯が多いのは印象的である。反っ歯は庶民に親しみのある顔だったのかもしれない。

反っ歯とは別に、“受け口にはったい見せな”と言うことわざがある。「はったい」は大麦などを煎つて粉にしたものであり、食べ物が少ない時代におやつ代わりに食べた。

受け口は反っ歯とは相反する歯並びであり、下の前歯が上の前歯より前に出ている。反っ歯は餅や西瓜を食べるのに利があると言っているが、両者ともに得意とすることの譬えであることに違いはない。

ことわざは公平だからよい。反っ歯と受け口はまったく違った歯並びだが差別することなく平等に応援する。

男は色黒^{いろくろ}く歯白^{はしろ}し

健康的な男の相を言っている。

「彼は大きな口をあけて、特徴のある笑い声でからからと笑った。(中略)色が黒いだけ

に笑うと白い歯が際立ってみえるのだ」(『人生劇場(青春篇)』尾崎士郎)。

色は黒くて歯が白ければ、いかにも男性的である。白と黒をなす肉体のコントラストは内面的にも竹を割ったような性格を想像させる。

パプアニューギニアに「結婚するには黒髪の女よりも白い歯の女」と言うことわざがある。わが国には「髪は鳥のぬればいろ」という言葉があり、真っ黒で青味のある艶やかな髪をよい女の形容に用いる。パプアニューギニアでは女の黒い髪は白い歯にはかなわないのである。

白い歯が健康の象徴であるのは、国と性の違いはあっても揺らぐことはない。

顔がほころび、白い歯がこぼれることを「白い歯を見せる」と言う。心を許して笑った証である。

白い歯は健康を象徴する一方、男の子はめったに白い歯を見せるものではない、と言われて育った世代もある。昔は白い歯であつても、歯を見せないのが男の美德であつた。

白い歯を好むのは今も昔も変わりはない。今は「審美歯科」と言う新しい分野が歯科に誕生した。歯を白くして、心まで明るくなったと言う嘘のような本当の話もある。白い歯には言葉では言い表せない力が宿っているのかもしれない。

「老人の歯の真っ白に揃っているのは少なくとも東洋人の容貌には調和しない」(『懶情の説』谷崎潤一郎)。

白い歯に水を差すようなくだりである。年輪を刻んだ老人の顔には煙草のやにで黄色に染まった歯のほうに似つかわしいと言っているのであらう。少なくとも白く光り輝く歯は不自然であり、年齢にそぐわないと言っている。

歯の価値は時を重ねた色合いにもあるようだ。

「色の黒いのが漁師の値打ち」という言葉がある。風雪に堪えた海の男の皮膚には、やはり白い歯が似合いそうだ。

唐茄子にお齒黒

唐茄子はカボチャ。

カボチャがお齒黒をつけたようだと揶揄している。

醜い顔をした女の蔑称である。

「下女は皆南瓜に目鼻、蕃茄子に鉄醬なるゆゑ、万左衛門は朝夕見るのも嫌なり」(『合巻』教草女房形氣一七)。

下女は跡形もなく、万左衛門にけなされている。

「南瓜かぼちゃに目鼻」は醜女の形容。

カボチャの称は女性固有のものではない。「カボチャ野郎」と罵る言葉があるように、顔形が悪くて、品性下劣な男もカボチャに見做される。

昔、わが国では、女性が成人すると、その作法の一つとしてお歯黒をつけた。奈良朝以前からある習慣で、十七がねと言ひ、十七歳でお歯黒をつける。

お歯黒は実際には嫁入り前後につけていた。平安時代には女性だけでなく、京都の上級武士もお歯黒をつけている。黒は変色しないことから、「忠臣二君に仕えず」の精神で公家に習ってつけた。

お歯黒は古い鉄くずを茶の汁か酸に浸して作り、それを筆にふくませて五倍子ふしの粉をつけて歯に塗る。

五倍子はアブラ虫が若葉に寄生して出来た虫こぶ。形は紡錘形。タンニン酸が主成分であり、インクや染料の原料としても使われる。

「婆さんはお歯黒を剥はがした 痕あとのきたない歯を見せて、恭うやうやしいような、人を馬鹿にしたような笑いようをして、頭を二三遍屈めて、その儘跡へ引き返していった」(『雁』森鷗外)。お歯黒は女性の人物描写の重要な要素。お歯黒をつける人間の違いにより、人物像を異にするのは興味深い。

“御歯黒溝のお玉杓子”という言葉がある。先の“唐茄子にお歯黒”と同じで、人を見下した言葉。無芸、無能な遊女を嘲っている。

どぶの中のおタマジヤクシのように手足がなくて、何の芸も出来ないと言うのである。お歯黒溝は大溝おおどぶとも言ひ、遊女の逃亡を防ぐために設けられた吉原周囲の下水溝を言う。江戸期に栄えたお歯黒の風習は、皇室では明治初期に終わった。民間ではお歯黒は大正末期まで続いている。お歯黒は時代と風俗に関係なく、成人女性の象徴であったことに違ひはない。

雷の落ちた樹きの皮は虫歯むしばの葉

どのような樹の皮がむし歯の葉になるのか分からないが、ブナの樹であれば可能性はありそうだ。

ブナの樹を乾溜して出来た木タールを蒸留すると、クレオソートが出来上がる。クレオソートにはフェノールが含まれており、フェノールには強い殺菌作用がある。

ブナの樹は高さ二〇メートル以上あり、北陸地方に群生する。北陸は雷が発生しやすいことを考えると、ブナの樹への落雷の確率は極めて高い。

ブナの樹に雷が落ちて、樹皮に化学反応が起きれば、クレオソートが生成される可能性は十分にある。

“ 歯の痛みを取るには落雷した木の枝を噛め ” は紀元前からローマにある言葉。

雷の落ちた木がむし歯の薬になるのは、どうやら真実に近い事実のようである。長い年月を経て得られた知恵に国の違いがないのがよい。

世の中で怖いものと言え、昔は地震・雷・火事・親父があつた。その雷がむし歯の痛みを取る手助けをするのであれば、怖くても雷神として敬うべきであろう。

“ 道祖土さいと焼の火で焼いた団子を食べると虫歯むしばの薬となる ” と言う俗信もある。

焼いた団子は虫歯の薬になるだけでなく、他の病気の予防にもなると言うから、これほどありがたい薬はない。

焼いた団子が虫歯に効くかどうかの科学的根拠がある訳ではない。有機化合物の塊である団子を火で焼けば、炭化して黒くなるのは確かである。炭化した団子に石炭タールのような物質が出来れば、クレオソートが生成されてもおかしくない。焼いた団子が虫歯の薬になるのは、まんざら非科学的ではなさそうだ。

江戸時代には牛蒡の種を炒り、それを煎じて口に含むと虫歯が治ると言う民間療法があつた。治療効果に科学的根拠があるのかといぶかしむものもあるかもしれないが、呪いのような民間療法に科学的根拠などあるはずがない。

頭の固い唐変木には、ことわざは猫に小判のようなものである。

虫歯むしばの痛むときには紙に塩を包んで噛み、それを馬屋の柱に釘づけにすると良くなる

塩を包んだ紙を痛い歯で噛み、それを馬屋の柱に釘で打ち付けるのが面白い。

歯の痛みを塩に乗り移らせて、それを馬屋に封じ込めると言うのであるうか。それとも、塩の好きな馬が塩と一緒に歯の痛みを噛み砕いてくれると言うのか。いずれにしても、一種の呪いであることに違いはない。

塩は白い紙で包むのであろう。白は神々しさを感じさせる。

白い紙と言え、人型の紙人形に息を吹き掛け、心身の罪や穢れを人形に託して祈禱所で払い除ける神事もある。

塩には不浄を祓う霊力が宿っていると、今尚、信じられている。祭りのときの祭場や祭具、家庭ではカマドや井戸を塩で清める風習がある。相撲でも土俵に塩を撒く。昔は塩を売る人にも敬愛の念を示したと言う。塩にはそれに値するありがたい霊力が備わっているのであろう。

人間は昔から虫歯の痛み悩まされ続けてきた。古今東西、歯の痛みの感受性に差はなくても、痛みの対処法は千差万別。

昔のヨーロッパには、“満月のときに捕ったトカゲの頭蓋骨で痛い歯を押さえろ”や、“人の頭蓋骨の中で育てた植物のジュースを飲むと歯痛が取れる”などと言った、奇妙な歯の治療法があった。

わが国にも歯の痛みを取る民間療法はいろいろあるが、ヨーロッパのものに比べると可愛いものである。

「私は小さい時から、冬になりかけるとよく歯が痛んだものだ。まだ母に甘えている時は、畳にごろごろして泣き叫び、ビタビタと梅干を一杯塗ってもらっては、しゃっくりをして泣いている私だった」(『放浪記』林芙美子)とあるように、昔は歯の痛みを取るのに梅干しの湿布を用いた。

今は市販されている経皮吸収型鎮痛消炎剤の中に酢酸を主成分としたものがある。梅干しにはクエン酸が含まれており、炎症による痛みを取っても不思議ではない。

塩に歯の痛みを鎮める科学的根拠はない。あるとすれば、塩に宿る霊力で不浄とも言われる歯の痛みを精神的に取り去ることは出来るかもしれない。

梅干しの種を囲炉裏に捨てると歯が痛くなる

梅干しは見るだけでも酸っぱくなる。つばも出る。歯も浮く。

歯が浮くと、何とも言えない一種独特の痛みに似た違和感を覚える。虫歯による痛みとは明らかに違う。不快な中にも心地よさを感じることがあるから不思議である。

歯が浮く感覚は嫌な言葉によっても生じる。歯の浮くようなお世辞は、一方ではくすぐったいような気持ちにさせるから複雑である。歯に生じる生理現象はなかなか奥が深い。

梅干しの種を囲炉裏に捨てると、なぜ歯が痛くなるのであろうか。

“梅は食うとも核食うな中に天神寝てござる”と言うことわざがある。

梅の種の中には天神さまが宿っているから、種を粗末に扱ってはいけない。捨てたりすると罰が当たり、歯が痛くなると諭しているのであらう。

酸っぱい感覚を歯の痛みに感じたのかもしれない。

古の人は梅の種の中にある核をいつしか天神さまと呼び、菅原道真が好んだ梅に思いを馳せたのである。

昔の人間にとって歯の痛みは体罰にも似た苦痛であった。歯の痛みは身近な痛みであり、俚諺や迷信の対象になるのは自然の成り行きである。

“蟹を構うと歯が痛くなる”や、“蟹の缺^{かま}を取ると歯が痛む”なども、誰もが犯しそうないたずらを戒めている。

蟹との戯れと歯の痛みは感覚的には結び付かない。あえて両者のつながりを理詰めで探ると、蟹の缺は人間の歯に等しい。共に食物を取るためになくならない大切な器官である。

蟹が缺を失うのは、人間が歯を喪失するのと同じである。蟹にとっては生命にかかわる大事態と言つてよい。

小さな命の大切さを、ことわざは歯の痛みで教えている。

梅と言えば、“梅干しの種^{たね}を海^{うみ}へ捨^すてると海^{うみ}が荒^あれる”という俗信もある。これも天神信仰に基づいた戒めであろう。

たかが梅干しの種であっても、囲炉裏や海に捨てると天神様の罰が当たると言うから、ゆめゆめ粗末に出来ない。

歯が痛むときは桃の木を噛むとよい

桃の木は霊木で、神仏が宿ると言う。

ことわざは信心深い人を応援するようだ。

古代中国でも桃の木は仏木とされており、邪気を祓う力があると信じられていた。桃の実^みは仏果として珍重されている。

桃はよいことづくめである。

“天竺^{てんじく}の御所のお庭の桃の木よ根を食うても葉を食うな”や、“御所のお庭の桃の木は枯れても葉は枯れるな”などと唱えながら桃の木を噛むと、歯の痛みが取れると言う。木より、根より、何よりも、葉を敬っているのがよい。

「葉を食うな」は「歯を食うな」を掛けて言っている。「葉は枯れるな」も「歯は枯れるな」と洒落ている。

共に歯よ、頑張れと励ましているのであろう。

歯の痛みは舌のような柔らかいもので触れるだけでも飛び上がるくらい痛い。それを霊木とは言え、桃の木のような固いものを噛めと言うのだから、常識を超えている。考えただけでも卒倒しそうだ。

歯の痛みより、木を噛むときの痛みが強ければ、歯の痛みは錯覚で相殺されると考えたのであろう。

かつて、虫歯の痛みを取る方法として、松葉のような先の尖った枝葉で患部を刺す民間療法があった。歯に強烈な痛みを与えて、虫歯の痛みを相対的に和らげたのである。

“歯痛があると頭痛を忘れる”は、イディッシュ（東欧）にあることわざ。

歯の激痛に比べると、頭の痛みなど比べものにならないくらい軽いと言っているのであろう。

強い痛みのもとでは弱い痛みは影が薄い。

“歯が痛むときは碁盤を拝むとよい”と言う俗信がある。

碁盤はカヤ、カツラ、イチヨウなどの木でこしらえた平面盤。盤上に縦横それぞれ十九本の平行線が引いてある。碁盤は棋士にとって神聖な戦いの場であるが、碁盤が歯の痛みを取るなど常識では考えにくい。

古川柳では、「碁盤」は京都市街の異称である。歯の痛みを治めるには天竺の御所のお庭の桃木を噛むよりも、碁盤上の京都御所を拝むほうが、御利益があると言っているのかもしれない。

人の楊枝を使うと歯くさを病む

人が使用した楊枝を使うと、歯茎が腫れて痛くなると言っている。

「歯くさ」は「歯瘡」。「瘡」は腫れものの意。今風に言えば、歯茎に膿が溜まる歯肉膿瘍であろう。歯茎がぶよぶよとして、触れると痛い。強く押すと膿が出るかもしれない。

楊枝は今の歯ブラシ。爪楊枝と房楊枝の二種類があり、用途により使い分けた。爪楊枝は歯の隙間に挟まった食べ物をせせり出すのに使う。房楊枝は歯垢を取るだけでなく、柄の部分で舌の苔を掻き落とすことも出来た。

楊枝の材料は白楊の枝。枝の先を尖らすと爪楊枝。枝の端を槌で叩き、房状にすれば房楊枝になる。

白楊には殺菌作用があり、『和漢三才図会』に「柳は口臭や歯茎の腫れや痛みを取る効能がある」と記されていると言う。

柳は白楊。

手水場の垣に楊枝の二三本

右は『誹風柳多留』の九篇にある一句。

江戸時代、長屋の厠かわやは共同使用であった。長屋の連中は用を足しながら、楊枝を使ったのであろう。厠を出るとき、誰かが垣根に先の尖った爪楊枝を刺したのである。

使った楊枝は歯垢や食べかすが付いているので不潔。昔の人は歯垢が歯茎の病気の原因になることを、すでに知っていたのである。

歯垢は臭くて汚いものとされていた。『仮名草子』の「尤之双紙」にも、むきき物の品々の一つとして、若衆の歯がすみが挙げられている。江戸っ子は歯がすみ、すなわち歯垢を嫌い、歯の白いのを粹と考えた。

“喰いつぶすやつに限って歯をみがき”と言う古川柳（『誹風柳多留』初篇）があるように、家運が傾いても、せつせと歯を磨くドラ息子もあつた。

“百足むかでに刺されたときは女の歯糞おんなはくそを付ければよくなる”と言う俚諺もある。

「歯糞」は歯垢の意。

歯垢の成分に男女差があるとは思われない。歯垢は揮発性硫化物やアンモニアを産生するであろうことは考えられる。

蜂に刺されたとき、アンモニア水を塗ると痛みが取れた。ムカデの毒にアンモニアが効くのであれば、歯垢もムカデの毒素を中和する働きがあるかもしれない。

歯垢は歯茎の病気を起こす原因になる一方、薬のような効き目もあるので、まんざら捨てたものではない。

歯の抜けた夢は不吉

歯の抜けた夢を見ると身内に死人が出ると言う。

歯が抜けると大切な人まで殺してしまうから始末が悪い。

“上歯うわばの欠けた夢を見ると目上の人が死ぬ”や“下歯したばの欠けた夢を見ると目下の人が死ぬ”と言う俗信がある。勝手に殺されたのではたまらない。

一方では“下の歯の落ちた夢を見ると目上の人が死ぬ”や“上の歯の落ちた夢を見ると目下の人が死ぬ”と言う、まるつきり反対のことを言った俗信もある。

ことわざはあくまでも柔軟である。同じ部位の歯が抜けても、その解釈に地域差があるのは愛嬌。

「一ひとに月地じに墮おちぬ、二ふたつには牙齒げし落おちぬ、三みには右の臂ひじを失ひつ」（『今昔物語集』一一）と

あるように、昔から歯の抜ける夢は悪夢の一つに挙げられている。

日本人の歯の欠落の思想は、宗教色が強くて悲観的である。唯心論的と言ってもよからう。精神分析の創始者フロイトは、歯の抜ける夢は精力の減退や性の中性化を意味すると言っている。精神分析では歯の脱落は性的予言であり、死を予告するものではない。肉体的警告であり、唯物論的と言つてよいかもしれない。

歯の喪失を難しく考える必要はなからう。歯は人の死と関係なく、何時でも、誰でも抜けるのが現実である。

歯の抜ける夢が不吉であるのは永久歯に限つてのことである。乳歯が抜ける夢を見て人が死んだのでは、命はいくらあつても足りない。

乳歯の脱落は決して不吉な出来事ではない。当たり前前の生理現象である。乳歯が抜け落ち、その跡に永久歯が生えるのだから、これほどめでたいことはない。

「經を誦しつる時に、わが口のなかより一つの歯缺かけて經の上に落ちたり。驚きて見れば、歯の缺けたるにあらずして、佛の舍利一粒なり」『今昔物語集』——十三。

歯が抜け落ちても、歯は仏舍利に化することがあるからありがたい。信仰心があれば、歯もまた仏に見えるのであらう。

上歯うわばぬ抜けたら堀の底に棄てよ、下歯したばぬ抜けたら屋根の上へ投げよ

乳歯が抜けたときの歯の始末の仕方について言っている。

歯を投げる場所に地域さはあるが、丈夫な永久歯が生えて来ることを願っていることに違いはない。どの地域でも上の歯は下に、下の歯は上へ向けて投げるのが興味深い。

上の歯は下へ、下の歯は上に向かつて生える。抜け落ちた乳歯を上下方向へ投げ分けることで、次に生えて来る上の歯は下に、下の歯は上へ向かつて、真つすぐ生えてくれと願っているのであらう。

上の歯を投げる場所は土の上、床下（縁の下）、雨落ち（雨垂れの落ちるところ）などが選ばれる。下の歯は決まって屋根へ投げられる。

今と昔では住宅事情は大いに異なる。家を取り巻く環境も違う。低い屋根を探すのに苦勞する。床下を見たくても覗く隙間すらない。土はさらに遠い存在である。今の床下はコンクリートで被われており、土を見ることも、触れることも、嗅ぐことも出来ない。

俗信とは言え、歯を昔のように始末するのは極めて困難である。

乳歯は自然に脱落するとは限らない。グラグラする乳歯は糸を結わい付けて自分で抜く

しかない。自分で抜くと手加減するので潔く抜けない。ためらうのが普通であろう。最後は母親の手を借りて抜くしかなかった。

乳歯の自然脱落は生理現象であり、神秘的と言ってよい。

永久歯の欠落の原因はほとんどが歯周病。むし歯で歯を失うのは稀である。永久歯とは名ばかりで、いつまでも息災である歯とは限らない。歯の病気に見舞われ、いつしか姿を消す。病気のため抜かれる永久歯に、乳歯のような儀式めいた作法はない。抜かれた歯は終末物として無機的に処分される。永久歯の一生は誠に味気なくて、寂しい。

乳歯は役目を果たしたあとでも、新たに生える永久歯のために手厚く葬られる。永久歯の扱いとは大違いである。

乳歯と永久歯の欠落では、見た目も天と地ほど違う。乳歯を欠いた幼児の顔は無邪気で天使のように可愛い。永久歯を失った大人の顔は、老けて、哀れで、貧相である。

櫛の歯欠くれば子に別るる

櫛の歯が欠けると、わが子と離別すると言う。生き別れか、死に別れか、分からないが、親子の縁が切れることに違いはない。

“櫛を人^{ひと}にやると縁^{えんぎ}切れになる”と言う俗説もある。櫛には人とひとをつなぐ不思議な力が込められているのであろう。

櫛は神霊が宿る身近な装飾品であるためか、櫛にまつわる俗信や俗説が各地にある。

「クシ」は「苦死」に重なる語感があることから、縁起の悪いものとされている。櫛は拾うものではなく、ましてや人に貰うものではないと言うのはそのためである。

持ち主不明の悪霊の憑いた櫛を拾うより、落としたほうがよいと言うのは、分かりやすく説得力がある。

一方では、ことわざは櫛に秘められた霊力を味方にするところがあるからホッとする。櫛にある力は忌まわしいものばかりではないから何とも頼もしい。

女が外出するとき、櫛をくわえて行けば魔物に憑かれることはないと言う。“櫛の歯を銜えると蛇^{へび}になる”と言う俗信があることから、女が蛇身になると悪魔も恐れ入るのである。

櫛には悪霊を祓う力が宿っているとも言われている。昔は病気の民間療法で櫛を使うことがあった。眼の病気の、ものもらいや、小児のひきつけには櫛を使って治療している。ものもらいは目を櫛で擦って治したと言うから、びっくりして、腰が抜けそうだ。ものも

らいも驚いて退散したに違いない。

ひきつけを起こしたときは、櫛で咽を擦ると意識が戻ったと言う。痛いほど擦れば意識は回復するかもしれない。櫛の靈力には近代医学も顔色なしである。

櫛の素材には黄楊、竹、象牙、べっ甲等が使われる。丹精込めてこしらえた手作りの櫛であれば、魂も籠りそうだ。

今は昔と違い、合成樹脂製の櫛が氾濫している。大量生産された櫛に魂が宿るはずがない。歯が欠けることもない。せいぜい櫛の歯が曲がるくらいである。汚れも洗えば落ちる。親子の絆はいつまでも安泰である。

櫛の歯を挽くが如し

櫛の歯は一本ずつ順次削ってこしらえる。櫛職人の手が次からつぎへと忙しく動くことから、人の往来や物事の流れが絶え間なく続くことの譬えに用いられる。

櫛の歯を挽く手が速く動き、連続しているように見えるのであろう。

「国々の早馬、鎌倉へ打ち重ねて、急を告ぐる事櫛の歯を引が如し」(『太平記』―十)は、早馬の頻繁な行き来が緊迫した臨場感を表している。

櫛の歯は時の成り行きの速さの譬えになるだけではない。蜜に並んだ櫛の歯は髪のような細いものしか通さないことから、“櫛の歯にさえ掛からずして、人の口の歯に掛かるといった言葉も生まれる。”

櫛の歯にも掛からないような些細なことでも、人の噂に上ると、あつという間に広がるという譬え。櫛の歯にも掛からないような小さなものでも、人の歯には引っ掛かると言いたいのであろう。

「口の歯」は噂の意。

「其身も定まれる妻の外に、他の女を犯し、江戸中の口の端に掛る不埒を仕出して、言語道断共いふべけれ」(『風來山人衆』風來六部集―下)とあるように、男女の醜聞もすぐに人の噂にのぼりやすい。

「口の端」は「口の歯」に同じ。

「櫛の歯を並べる」という言葉がある。櫛の歯は一定の間隔で密に並んでいる。整然と並んだ姿は家族のつながりにも似ている。その家族が一人でも欠けると、「櫛の歯が欠けたよう」と言う。在るべき人がいなくなるのは実に寂しい。

櫛の歯であれ、人の歯であれ、歯はそれぞれの使命を担っている。順次削ってこしらえた

櫛の歯は人の命のつながりにも見える。長い時の流れの中で、親子や兄弟・姉妹の関係が誕生する。人の歯も櫛の歯も一本たりとも欠けてはならない。

歯の欠けた寂しさは埋めようがない。

牙きはを嚙かんで日を送る

歯を食いしばり、赤貧に堪え、豊かな日が来るのをじっと待つと言う譬え。

ネズミが洪水に合い、飢えと寒さに歯を嚙み鳴らし、樹の上で辛抱強く堪えている姿を言い表している。

「跡より続く御方はなし。安からぬ者かなと牙を嚙かて本陣へと引返さる」『太平記』——三十一。

牙を嚙むのは苦しみや悲しみに堪え忍ぶときだけの所作ではない。意に反する行為に憤慨するときにも牙を嚙む。人間の歯であっても、ときと場合によっては牙と称することがある。

「かむ」を表す言葉の「嚙かう」や「嚼しゃ」の他に、「咬こう」「咀そ」「嚙げう」「咬嚼こうしゃく」「咀嚼そしゃく」「嚼嚙しゃくげう」などいろいろあり、これらを状況により使い分ける。同じ「かむ」の語意であっても、微妙な意味の違いがあるようだ。

歯のことを「牙きは」と書いたり、「歯牙しが」と言ったりする。牙は先の尖った歯の意であり、動物では肉食動物の歯が牙に相当する。ヒトの歯では犬歯を含む前歯が牙に当たると見てよい。歯牙の「歯」は狭義では臼歯を指すが、広義ではすべての歯の称である。

ヒトの歯であっても歯を牙と言うときは感情的であったり、攻撃的である場合が多いようだ。

「歯牙にも掛けない」という言葉がある。高慢な態度を取るときの際えとして用いる。「牙を鳴らす」は、堪えがたい怒りが心頭に発し、歯まで震わせてしまうさまを言う。

「歯を嚙む」も感情を表す言葉であり、怒りや、悔しさを表すときの用語。

「歯を嚙かみ口を開て疾く走り寄て員かずを尽して踏殺しつ」(『今昔物語集』一四)は、激怒した様相を表している。

歯をかねて十月待とつきつてる國家老

右は『誹風柳多留』の五十一篇に見られる一句。

國家老もネズミに負けていない。歯を食いしばり、主君に代わり領国を必死に守っている。ヒトに限らず、動物にとっても、「嚙む」と言う行為は精神衛生上、大切な所作であると

言つてよからう。すべては歯があつての話。歯がなければ、噛むことも堪えることもままならない。

鰾うまめの歯軋はぎしり

悔しいが力不足のため、どうすることも出来ないことの譬え。

「田作ごまめの歯はぎしり、家鴨あひるの木登り」(『歌舞伎』紋尽五人男―序幕)は、悔しさを最大限に言い表している。

「田作」はカタクチイワシを素干しにしたもの。「鰾」に同じ。

カタクチイワシの歯は上下がでこぼこした鉸こうし歯であるため、ヒトの歯のような噛み合わせが出来ない。歯質は刷毛のように柔らかいので、噛めば曲がつてしまう。これでは歯はぎしり出来ない。鰾が悔しがるのは無理ならぬことである。

歯はぎしりは歯があつてのこと。固い歯がなければ歯はぎしりしたくても出来ない。あひるはあひるで、木に登れないから悔しい。

歯はぎしりは眠っているとき、上下の歯を強く噛みしめる生理現象。キリキリと言う厭な音は、そばに寝ている人に迷惑をかける。本人は無意識に歯を噛むのだから自覚がない。罪の意識がないのは当然のことであろう。

歯はぎしりは夜するとは限らない。昼間でも歯はぎしりすることがある。日中の歯はぎしりは、怒りや悔しさを表す比喻として用いるのが普通である。

「歯はぎりして、細腰もだえて、扱なみだてもく。にくひ女が、ある物かな」(『好色一代男』―四)。

「歯はぎりして、こぼす泪雨なみだのごとし」(『好色二代男』―六)。

「白眼にらみつけて齒切りして、骨髓こっすい通してうらみし有様」(『好色一代女』―三)。

右のくだりにある「歯はぎり」や「齒はぎり」は、歯はぎしりと同じ意である。

井原西鶴の好色ものには、「歯はぎり」はつきものらしい。

悔しいと言う感情はなぜ起こるのであろうか。

人間には常に欲望がある。欲望が満たされなければ失望し、悔しさがつのる。悔しさを味わいたくなければ、大それたことは望まないほうがよいことになる。それでは向上心は生まれない。

人間、多少の悔しさは避けては生きられない。悔しさは飛躍の原動力になることもある。歯はぎしりも捨てたものではない。

切齒慷慨こうがい

「切齒痛憤」つうふんも同じ意。

物事に憤慨すると、つい歯ざしりしなくなる。怒り心頭に発すると、憤りは歯を越えて体全体にまで及ぶ。

「切齒扼腕」やくわんという言葉がある。歯ざしりし、それでも怒りが収まらないので、自分でじぶんの腕を強く握りしめることを言う。体を震わせながら、怒りに堪えるのである。怒りを外に向けて発散するのではなく、自分の心の中で昇華しようとする努力と言ってよからう。要するにキレないのである。

身の回りには怒りの種が山ほどある。いちいち腹を立てていたのでは、腹はいくらあっても足りない。さりとて穏やかな顔ばかりはしていられない。心の中は複雑である。

世の中にはしてはいけないことをする人間があるから、「してはいけない」と警告するのであろう。JRの車内放送で携帯電話の使用についての協力を呼び掛けている最中に、隣の席では聞く耳を持たない若者が透明人間と話している。

「歯ざりざりく口惜し涙」(『心中天の綱島』近松門左衛門)とまではいかないまでも、気の弱い被害者は、傍若無人に振る舞う男の横で泣き寝入りするしかない。

「天を仰ぎ、歯をくいしばって、『きさまを必ず成敗して、今後とても世界にいつべき遍歴の騎士の従士たるうそつきことくくのみせしめにくれるわ!』」(『ドン・キホーテ』正編―三・岩波文庫・永田寛定訳)。

さすがに騎士は泣き寝入りしない。歯を食いしばり、打つべき策を練る。

世の中の仕組みは実によく出来ている。気の弱い人間があれば、気の強いものもある。気が弱いと歯ざりするのが関の山だ。気が強いと歯を食いしばり、怒りを強い力か鋭い言葉に変える。気の小さい人間にはできない芸当である。

「歯切りして腹立つれば、いづれも興を冷まして開いた口をふさがず」(『浮世草子』好色萬金丹―三)と言う。

切齒慷慨すると後味の悪さが残るようだ。何も出来ずにいる小心者のほうが救われるかもしれない。

神馬の食べた豆を食べると歯ざしりが治る

俗信である。

豆が歯ぎしりに効くかどうか分らない。

昔から馬は神の乗り物として敬われ、神社に奉納する風習があった。雨乞いするときは黒毛の馬を、晴天を祈願する場合は赤毛の馬を献上したと言う。

神社で飼養する馬は他の馬と区別するため、神社院などの特別な場所で養った。神馬の中でも白馬は珍重され、人はめったに乗ることはない。

神馬は豆を常食とした。豆は五穀の一つで、米と共に呪力のある穀物とされている。節分の豆まきでは、拾った豆を歳の数だけ食べると厄払いになると言う風習もある。豆は「魔滅まめ（魔を滅す）」に通じることから、豆を食べて無病息災を願ったのである。

先の俗信でも豆の靈力にあやかり、歯ぎしりを治そうとしたのであろう。昔は各地の神社に、「神馬が食べた大豆を煎じて飲むと、歯ぎしりや夜泣きが治る」と書いた立札があったと言う。

歯ぎしりは咀嚼筋の異常な緊張により、歯を無意識にこすり合わせたり、食いしばったりする習癖を言う。睡眠中に歯ぎしりすると、キリキリと言う厭な音を立てる。

「息子むすこどのの寝言ねごと掛合かけあいにギリく歯はを咬かむといふもんだから、やかましくて寝ねつかれねへ」
（『浮世風呂』——二）。

右の一節は歯ぎしりと寝言の二重の安眠妨害を嘆いている。歯ぎしりの被害に、今も昔も変わりがないのが面白い。

歯ぎしりに神馬の食べた豆が効くと言うのは古川柳にもある。

歯ぎしりに神馬喰料かわかされ

（『俳風柳多留』五十二篇）

参拝者が、神馬の飼料の豆を歯ぎしりの治療に用いるため、勝手に持ち帰った。

気の弱い人間が、神馬の餌が無くなりかわいそうだと心配している。

歯ぎしりの原因が精神の緊張によるものであれば、豆の呪力で金縛りにあった咀嚼筋の緊張はほぐれるかもしれない。

歯の根を鳴らす

怒りや悔しさのあまり、歯ぎしりするさまを言う。

「隙間もがなとにらみよる久馬も先をとられじと、はがねならし拳を張り」（『浄瑠璃』用明天皇職人鑑——職人尽くし）。

歯ぎしりして拳を構え、悔しさを身と心で精一杯表している。

「はがねならし」は「歯が根鳴らし」。

歯ぎしりと同じ意の言葉に「歯噛み」がある。歯噛みはどちらかと言えば、歯をもろにむき出していて怖い。「獅子の歯噛み」がそれである。獅子は大きな歯をむき出し、恐ろしい様相をしている。

歯は突如として悲鳴を上げることがある。

「身の毛立、震ながらも逃出人には人里遠しと歯の根も合わず」『談義本』化物判取牒――一）。

「我くなどは猶^{なほ}の事、なんだか、ぐわたくと、以上^{いじやう}歯^{あひ}の根が合ませぬ」『歌舞伎十八番集』暫^{しばいへく}）。

「歯の根が合わぬ」は、寒さや怖さのあまり、体に震えが起こり、上下の歯が噛み合わないさまを言う。上の顎は動かないが、下の顎が上下に震えるので歯は正しく噛み合わない。

一方では、悲鳴を上げることが「音を上げる」と言う。「歯が根を鳴らす」も、歯が音を上げているのであろう。歯を擦り合わせようが、歯が衝突しようが、歯に加わる力は強い。歯が音を上げてもおかしくない。歯の中でも根のところが音を上げる。「根^ね」に「音^お」を掛けて洒落ているのかもしれない。

歯を切る

悔しさや怒り、または苦痛などに歯を食いしばり、必死に堪えるさまを言う。

「歯^{せつ}を切す」や「歯切^{はぎり}」も同じ意。

「勘六、歯切りをして、腹を立」『好色一代男』――五）。

勘六は傾城買いで足元を見られたのである。

「我もそんな事は三年前よりよく覚えし物をと、歯切りをしてこらへける」『好色一代女』――一）。

情事を見せつけられ、自分もすでに女であるのにと思い悔しがる。

「地黄丸^{ちやうぐわん} 吞む若きに語れば、歯切をして口惜しがりぬ」『好色一代女』――五）。

「地黄丸」を飲み、準備万端整った若衆が、据え膳を食わなかった男の話を聞いて悔しがる。

「地黄丸」は地黄が主成分の漢方薬。補血や強壮剤に用いた。

西鶴の作品には男女の切歯するくだりが多い。男と女の間には、切つてもきれない切ない

思いがあるのであろう。

人間、長く生きていれば、多くのことを見聞きする。楽しくて切歯することはない。歯噛みして歯を食いしぼるのは、すべて悔しい思いをするときである。

「大地をたつき歯噛みをなし、拳を握り嘆きしは、道理とも笑止とも思ひ、やられてあはれなり」は、『曾根崎心中』に見られる一節。

近松門左衛門も感情表現には井原西鶴に負けていない。

昔の人は怒りや苦しみに対して歯を食いしぼり堪えた。歯を食いしぼるのは感情を惹起する刺激に対する心身の対応である。自己制御のための順応と言ってもよからう。

歯を噛みしめれば歯は磨り減る。古の人の歯は固い食べ物だけでなく、歯切りによっても磨り減ったに違いない。

今は大人も子供もすぐにキレル。キレル前に歯を食いしぼり、怒りに対して堪えるのが望ましい。心を切るのではなく、歯を切ればよいのである。歯は物を噛むときだけでなく、我慢するときにも使うべし。歯切りで磨り減った歯は忍耐の証になるかもしれない。

唇竭きて齒寒し

互いに助け合っているもの同志のうち、どちらか一方が減びると、他方も危うくなると言う譬え。

唇は歯を被い守っている。その唇が破れると歯は露出し、寒くなると言っている。

出典は「唇竭きて則ち齒寒く、魯酒薄くして邯鄲困まる」『莊子』胠篋。

魯の国が献上した酒が薄かったため、同盟国の趙の国の首都、邯鄲まで包囲されたと言う。

「唇亡びて齒寒し」も同じ意。

密接な関係にある国を「唇齒の国」と言う。利害関係の強い間柄と言ってもよい。

「唇齒輔車」は、さらに相互扶助を強調した譬えである。

輔車の「輔」は漢語の上顎骨。「車」は下顎骨を意味する。下顎は上顎の支えがなければ、円滑に顎運動することが出来ない。何事も互いに助け合わなければ、うまく運ばないと言う譬えである。

古の人の言葉には重みがあり、疎かに出来ない。

人であつても、国であつても、近隣同士は協力し合うのが望ましい。人が集まり、人との距離が縮まると温かい触れ合いが生まれるはずである。現実はどうもそうではないようだ。人との物理的な接点は増えても、心の接触は少ないように思われる。

フランスのことわざに、「隣がよければ朝はすつきり」と言うのがある。

近所付き合いが楽しいと、厭な夢など見る暇はないと言っているのであろう。

「私の親戚よりも私の歯」はスペインにあることわざ。

人は誰でも自分が一番可愛い。そして最も大切だと思っている。唇と言う親類はなくても、自分の歯で寒さ知らずの生活が出来ると言っている。東洋の思想とは大違いである。「唇歯輔車」など、きれいごとは言っておれないだろう。

歯は西洋では食の譬えになるだけでなく、力の象徴でもある。

鬼の牙きばにも当たってみる

ものは試しだから、勇気を出してことに臨めと言っている。

「虎穴こけつに入らずんば虎子こじを得ず」の譬えに似ている。

鬼は想像上の動物。普通は無慈悲で冷酷な人間を表す言葉として用いる。

「鬼婆」「鬼検事」「鬼軍曹」などがその例である。

鬼は架空の生き物とは言え、その恐ろしいものの牙に当たれと言うのだから、これ以上怖いことはない。生死にかかわる一大決心がいる。

「牙」は哺乳動物の長くて鋭い歯を言う。ライオンや犬の大歯が牙に相当する。

ヒトの場合、歯を「歯牙しが」とも言うが、このときの「牙」は前歯を意味する。歯が鋭く尖っているからである。「歯」は奥歯の意。奥歯は臼のようにどっしりした形をしているのが特徴。

言葉としての「牙」は武器や悪意など、人に危害を及ぼすものの譬えとして用いることが多い。

「牙を研ぐ」や「牙を剥く」などがその例である。

人間、誰しも危険は冒したくない。願わくば一生息災で過ごしたい。平和と安全が大好きである。命を守るためであれば、石橋の二つや二つ叩き割っても恥とは思わない。

皮肉なことに、この世は無常である。災いは自分の意志とは関係なく、容赦なく降り注ぐ。この世に神も佛もないものかと恨みごとを言いたくなる。平和なときの、生かされていると言う気持ちが実にむなし。

死を決しての大英断は平和な世には馴染まない。必死の覚悟でことに臨む姿勢は争いのない時代であっても尊いはず。悲願の結果を得たければ、やはり大胆不敵な行為も必要であろう。

「難に因りて乃ち材を見し、止まらざれば將に得ること有らんとす」は、北床の政治家であり、学者でもある欧陽脩の詩『韓公閱古堂』の一節。

困難に直面して初めて才能が発揮され、それを継続することにより結果が得られると言っている。

牙あるものは角無し

天は二物を与えずと言うこと。

すべての才能を兼ね備えたものはないと言う譬えである。

「歯を与うるにその角を欠く、翼を作るにはその足を二つにす」も同じことを言っている。

鋭い歯を持つ動物には角がなく、翼のある鳥は足が二本しかないと言う。

動物に限らず、人間もすべての才能を兼ね備えることは出来ないと言っているのである。

ヒトには角や翼はないが、強くて丈夫な歯と器用に動く手足がある。手足の能力は角や翼に勝るとも劣らない。神は人間に何を与えなかったのであろうか。それに気付くのは難しい。

「牙」の称はおもに動物に用いるが、ヒトでも「牙」の一字で歯を表すことがある。

『もしや里通ひも今日切』と牙を齧みて怒りければ（『浮世草子』傾城禁短氣―一）。

「牙を齧みて」は歯噛みすること。切歯して怒るのである。

「床に入れば、空寐入して牙鳴をしたり」（『浮世草子』好色萬金丹―三）。

「牙鳴」は歯ぎしり。

造化の神はヒトも動物も極端に偏ることなく、公平にこしらえていると言う。牙と角を兼備する必要はなく、どちらかで足りると言っているのではなからうが、牙も角も欲しいと考えるのが普通であろう。

万物に平等であるはずの神であっても、ときには目をつぶることがあるようだ。牙も角も兼ね備えた多才な人間があることが、そのことを証明している。牙も角もない非力な凡人には、「牙あるものは角無し」という言葉が空しく聞こえてならない。

牛の歯を拾うと金持ちになる

牛の歯はめったに落ちたりしないので価値があり、それを拾うと縁起がよいと考えたのである。

俗信とは言え、ありがたい話である。

「牛が家の中に入ってくるとめでたい」や、「牛に追い掛けられた夢を見ると縁起が良い、馬は悪い」などと言った俗信もある。

馬を引き合いに出しているのが面白い。

牛は馬と共に、農耕や食肉に供されるのが共通点。歯については異なるところが多い。

牛の上の歯は切歯も犬歯もない。その代わり、小白歯と大白歯がそれぞれ左右に三本ずつある。下の歯は切歯が三本、犬歯が一本、そして小白歯と大白歯がそれぞれ左右に三本ずつある。

牛の前歯は上にないので、下の前歯と噛み合わない。小白歯と大白歯はしっかり噛み合う。馬の歯は牛と違い、上下の歯が同じように揃っている。よく噛み合う。上下の歯は共に切歯三本、犬歯一本、小白歯三本、大白歯三本がそれぞれ左右にある。犬歯は雄しかないのが特徴。

馬の犬歯は雄だけにしかないのが興味深い。犬歯は雄同士で雌を奪い合うときに使うと言うから何とも痛ましい。

牛の犬歯は雌雄ともに上顎にはなくて、一見弱々しく見えるが、繁殖力は旺盛である。大形草食動物の中で最も繁殖すると言われている。

「牛の寝た程」という言葉があるが、これは大量の金銭を積み上げたさまを言う。

牛の繁殖力と大金はどうやら関係がありそうだ。

「牛の糞を知らずに踏むと銭を拾う」と言う俗説もある。

「牛の歯で上がない」と言うことわざがある。牛は上の歯がないので、もうこれ以上のもはないと洒落て褒め上げている。それにしても、昔の人は牛の歯をよく観察している。

牛の落とした物は何かにつけて縁起がいいようだ。あり得ないことや、あつては困ることを縁起にするのもことわざの妙であろう。

一 黒陸頭耳小歯違う

牛の鑑定法である。

毛は黒く、頭は平らで、耳は小さく、歯は食い違っているのがよい牛の相であると言う。語呂合わせで、「一石六斗二升八合」と言うこともある。

「惣毛一ツ色真黒牛。渡り縹子も及ばぬ色艶。天角地眼一ツ黒直頭耳小齒違」『浄瑠璃』菅原伝授手習鑑―四）。

全身の毛は真つ黒で、渡来の縹子も及ばないほどの色艶をした牛が、さらによい牛であると言っている。

角の構えと、眼の備えのよい黒毛和種の牛を言っているであろう。

「縹子」は縹子織りにした織物。「渡来」は中国からの輸入品を言う。

牛は草食動物だから臼歯がよく発達している。臼歯は大きいだけでなく、数も多い。小白歯と大白歯がそれぞれ三本あり、それらが上下左右にある。臼歯が多い分、前歯の数は少ないのが特徴。

下の前歯は、切歯が左右に三本、犬歯が一本あるが、上には前歯は一本もない。これでは上下の歯は噛み合わない。「食い違う」とは、このような状態を言うのであろう。

牛の歯は上下食い違っているが、上の前歯の歯茎と下の前歯で器用に草を噛み切る事が出来るから不思議である。顎の動きがヒトとは違うので、それほど大変な噛み合わせではないのかもしれない。

ヒトの顎は下顎が上下に運動する。牛は下顎を左右に動かして物を食べる。草食動物は歯を碾き臼のように、水平方向に使うのが特徴である。

「頭は赤く毛は空へ生えて、眉毛は三十丈許り生ひ下りて、歯は上下へ生ひ違ひ、頬は鐵の如くにて、眼にして日を出せり。恐ろしさ限り無し」『お伽草子』毘沙門の本地）。

牛の話ではないが、鬼神の恐ろしい様相を語っている。

牛の歯がいくら食い違っているても、鬼の牙に比べれば可愛いものである。牛の歯は犬歯がなくても食い違いが、鬼の牙は犬歯が鋭く伸びているのでさらに食い違う。

犬の歯に蚤当たり

犬の歯のように噛み合わない歯でも、ときには蚤を噛むことがある。

まぐれ当たりすることの譬え。

「犬の歯に蚤」とも言う。

犬の歯は上下左右に切歯が三本、犬歯が一本、前臼歯が四本、そして後臼歯が三本ある。歯の数は牛や馬と違い、上下ともに同じ数だけある。歯は整然と並んでいるが、噛み合わせは肉食動物ならではの様相を呈している。

上下の切歯と犬歯は交互に噛み合う。前臼歯は噛んでも上下の歯は接触しない。これで噛

めるのだから不思議である。

後臼歯は切歯と同じように交互に噛み合う。牛や馬の臼歯は臼のような働きをするが、犬の臼歯は切歯と同じ役割を果たす。臼歯とは名ばかりで、食物をすり潰すのではなく、噛み切るのである。

「噛み合う」や「噛み合わない」といった言葉は、歯の噛み合わせに限ってあるのではない。言葉の譬えとしても用いられる。

人との会話で話が噛み合わなければ、意は通じない。意思の疎通がなければ会話にならない。噛み合わない話は犬の歯と同じである。会話に接点がなければ、話は意味をなさない。先に引いた「犬の歯に蚤当たり」は、物事に出くわす確率は低い、可能性はゼロではないことを暗に示している。まぐれ当たりするかもしれないのである。

「犬の歯に蚤一つの富だから、ほれられやうと思うが不通」『洒落本』喜夜來大根。

惚れられる訳がないから、あきらめろと言っている。

江戸っ子は潔い。未練は残るが、まぐれ当たりに期待しない。

ことわざの解釈は偏らないのがよい。夢があつたり、現実味を帯びたりする。一方的でないから救われる。

白い歯を見せぬ

毅然たる態度で、厳しく対応するさまを言う。

「父は監督の言葉の末にも、曖昧あいまいがあつたら突っこもうとするように見えた。白い歯は見せないぞという気持ちだが、世故せこに慣れて引き締まった小さな顔に気味悪いほど動いていた」『親子』有島武郎。

若い農場監督の早田に対する七十二歳の農場主の取った厳しい態度である。昔の男が示した強い姿勢と言つてよからう。

「男の子育てる時は白歯しろは見せるな」と言う俗信がある。

昔は男が白い歯を見せることは滅多になかった。父親はとくに男の子の教育には厳しい。言葉より先に父親の理不尽な鉄拳が飛んでも、子供は歯を食いしばり堪えるしかなかった。愛の鞭だと言われても不思議に思わないのが普通である。

遠い昔の江戸時代でも、武士は滅多なことで白い歯を見せて笑うことはなかった。「三年に片頬ほお」という言葉があるように、三年に一度笑えばよいほうだった。それも片頬だけ。両頬で笑うには六年かかる勘定になる。それくらい笑わなかった。

武士が笑わないには訳があった。笑うと相手を辱しめることになるという。どうしても笑いたければかわや厠に行つて笑った。相手を思い、面前での笑いを慎んだのである。

「厠」は、今の「便所」。

男が笑わない時代は明治まで続く。日本人が白い歯を出して自由に笑えるようになるのは戦後のことである。

今は白い歯を見せないのをよしとする男は少ないであろう。ましてや何の理由もなく、わが子に手を上げる父親などあるはずがない。男が女房や子供に白い歯を見せないのは、実は誰よりも弱い心の持ち主であることを、自認していたようなものである。

「女に白い歯しろはは見みせられぬ」という言葉があるが、これも今では死語に近い。

男がいつまでも口を閉ざしていたのでは男が廢るかもしれない。

白い歯を見せる

心を許した笑顔を言う。

「顔が真黯まつくろで歯だけが真白い歯美人のA女子」『思い出の記』徳富蘆花。

「白い歯を出して笑いながら『源ちゃん昨夕ゆうべは——つい忙しかったもんだから』といった」

『吾輩は猫である』夏目漱石。

「白い細かい歯が、行燈の明かりできらめいた」『牛タ・セクスアリス』森鷗外。

「眼を細くして、白い歯を出して、小さな齧くはをよせて、笑っているのを見ると、これが大きくなって、世間の人間のような憐れむべき顔になろうとは、どうしても思われない」

『戯作三昧』芥川龍之介。

「波が全身におつかぶさるたびに船長は囁はやした。三吉も滝のような水しぶきを浴びながら白い歯を見せて笑った。綱はついに結び付けられた」『海神丸』野上弥生子。

小説家が「白い歯」を好んで用いるのが印象的である。

歯の色は実際には真つ白ではない。淡い黄色をしている。淡黄色の象牙質が無色透明なエナメル質を通して透けて見えるのである。

小説で「黄色い歯を見せて笑った」と言ったのではあまりにも現実的である。虚構の世界では色をなさない。歯の色に触れず、「歯を見せて笑った」では、臨場感に乏しい。やはり「白い歯」と言ったほうが伝わりがよい。

小説家が白い歯を好むのは、歯は白くあるべきだと思っているだけではなからう。「白い」という言葉には「色が白い」と言う語意だけでなく、「正しい」「清い」「汚れない」など

の意の含みもある。

笑えば口元は自然とほころび、白い歯がこぼれる。「白い歯」と言う表現は心が清く、肉体的にも健康であることの象徴であつても違和感はない。

スリナムのことわざに「歯を見せることがすべて笑うことではない」と言うのがあるが、やはり笑いには白い歯が欠かせない。

歯に衣着せぬ

自分の考えや意志を思ったままズバリ言うこと。

歯は言葉の譬えである。「歯に衣着せぬ」は、むき出しの言葉であり、何事も包み隠さずあからさまに言うので、人の気持ちを害しやすい。

「小さいやらしく蜜男があるから御勘弁ものだト歯に衣着せざる一言に、こらへかねたるやまとだましひ」(『春色梅児譽美』―三)。

遣手婆のおくまが、お蝶には蜜男があると告げ口したので、藤兵衛はその一言に憤慨した。あからさまに言われたのでは男の立つ瀬がない。

「蜜男」は隠し男。「やまとだましひ」は大和魂。日本人固有の精神を言う。

時代に関係なく、言葉遣いは難しい。事実をありのままに伝えると角が立つことがある。奥歯にももの挟まったような言いかたでは意が通じない。さりとして歯の浮くような美辞麗句を並べても心を打たない。言葉を選ぶのは至難の業である。

率直にものを言うのは決して間違つた作法ではない。むき出しの言葉は仇になることがあるのは確かである。自分の思いをあからさまに言える間柄であつても、配慮のない言葉は人の心を刺す。無神経な棘のある一言が、大切な人の心を傷つけてしまつてはことである。

スワヒリのことわざに、「舌は歯よりも傷つける」と言うのがある。言葉の力は腕力より強いので、人の心を傷つけやすいと言っている。

むき出しの言葉の与える影響は想像以上に大きい。

自分に忠実で、相手を思いやる言葉があると素晴らしい。言葉の世界でも、正直すぎるとバカを見る。

正直とは歯に衣着せない言葉である。

歯に血を付ける

血を吐くような思いで訴える、切実な感情表現の譬えである。

「一撥等歯に血を付けて云いける、此寺門を立置過分の所領を坊主どもにとらせ、無益の事也」(『俚諺集覽』)。

圧政に反抗した農民や一向宗信徒らが徒党を組み、一向一揆を起こした。弱い立場にある貧しい人間が命懸けで不満を直訴したのである。

「一向一揆」は室町・戦国時代、北陸・東海・近畿地方などの各地に起きた宗教一揆を言う。真宗本願寺派の一向宗の僧侶や門徒の農民たちが一致団結して、守護大名や戦国大名の領国支配に反抗した。

「歯に血を付ける」は切実な思いを訴えるときの言葉の譬え。それが、どうして歯と血につながるのだろうか。

そもそも「歯」と「刃」は言語的に同源である。歯は食物を噛み切るときに使う大切な器官。刃は物を切ったり、削ったりするときに用いる道具の平たくて鋭い部分を言う。

「刃」と「血」は縁語に近い。刃物で負傷すると血が出る。刃に血を付ける代わりに、「歯に血を付ける」と言う成句があってもおかしくない。

歯は言葉の譬えである。言葉という刃物に血が付く思いで訴えるのである。

血に臭いがある訳ではないが、言葉としては生臭い。血に結びつく言葉の多くは非情・悲痛・悲壮などを意味する。

「血も涙もない」「血で血を洗う」「血の出るような」などがそうである。穏やかでない言葉が多い。

血の付く言葉は人間固有のものではないようだ。ヒト以外の動物にも血の付く言葉がある。

「血に啼く」はホトトギスの鋭くて痛切な鳴き声を言う。鳥にはヒトと同じ歯はないが、歯に血を付ける思いで必死に鳴くのであろう。血を吐くほど激しく鳴く声は悲痛な訴えにも似ている。

今は「歯に血を付ける」など、血生臭い言葉を耳にすることはない。平和で豊かな時代には縁のない言葉なのであろう。

泣血三年、未だ嘗て歯を見わず

親の死を深く悲しんでいる。

死後三年間、声を出して泣くのを憚り、目から血の涙が出る思いで忍び泣く。決して白い歯を見せて笑うことはなかったと言う。

親の死の悲しみを強く言い表した言葉であり、薄情者には真似の出来ない所作である。

出典は『礼記』の「檀弓上」。

親の死に限らず、身近な人の死は実に悲しい。悲しくて白い歯を見せるものはないが、号泣し、身を震わせるものはある。

口を真一文字に結び、目には涙を溜め、必死に悲しみに堪える姿はさらに涙を誘う。真つ赤に充血した目からあふれ落ちる涙は、さながら流血の涙である。

歯をあらわにしない姿は、笑わない姿勢を保つだけではない。閉ざされた唇の奥には強く噛みしめた歯が隠されているかもしれない。

厳しさには自分に対するものと、自分以外のものに対する厳しさがある。親の死と言う悲しい現実には、自分への厳しさが求められる。

四十九日間、喪に服し、白い歯を見せることなく過ごすだけでも容易なことではない。それを三年間、悲しみに堪え抜くことの比喻とは言え、凡人には気の遠くなるような業と歲月である。

親の死を悼まない子はいない。子の死を悲しまない親もない。どの命もかけがえのない大切な宝物である。

親思ふ心にまさる親心

今日のおとづれ何と聞くらん

右は吉田松陰の辞世の句。

子は親の死を深く悲しむが、親はそれ以上に子の死を不憫に思う。松陰親子も赤い目に涙を溜め、切歯して悲痛な思いに堪えたのであろう。

目には目を、歯には歯を

過激な言葉であるが、『ハムラビ法典』や『旧約聖書』に記されている。

人が危害や損傷を受けたとき、被害者は加害者に同程度の仕返しをしてもよい。加害者は被害者の被った害に相当する償いをしなければならぬと言ふ譬えである。

『新約聖書』の「マタイ伝―五」では、イエスは『目には目を、歯には歯を』と云えることあるを汝ら聞けり、されど我は汝らに告ぐ、悪しき者に抵抗^{てむか}ふな。人もし汝の右の頬をうたば、左を向けよ」と、対人関係の問題を愛と忍耐により対峙するよう説いている。

先の言葉の中で、目と歯を攻撃の対象にしているのが興味深い。

目を危害の第一の標的にすること何の違和感もない。「眼を抜く」や「目をつぶす」などと言った物騒な言葉がこともなげに使われる。

二つ目の標的が耳、鼻、口ではなく、歯であるのが目を引く。

歯は体の中で最も固くて強靱な器官。比喻では力の象徴になる。その頑強な歯をへし折ると言うのだからすさまじい。

歯を失うと咀嚼が不自由になるだけでなく、精神的にも苦痛を伴い、心に深い傷を残す。歯が罪の償いの中でも上位にあるのは、肉体的にも大切な器官であることを暗に示しているであろう。

動物にとって歯の喪失は、ラ・フォンテーヌの『寓話』の「恋するライオン」にあるように、死そのものを意味する。鋭い爪は残っても歯の代償にはなるまい。

人間が歯を失っても、直接、死につながることはない。欠けた歯は人工歯で補うことが出来る。

慈悲とは程遠い世界に住む凡人には、「目には目を、歯には歯を」の償いの精神を、愛と忍耐の優しい心で対処することは難しい。

下駄を畳たたみの上で履うえくと歯が欠ける

下駄は畳の上で履くものではない。下駄の歯が欠けると縁起が悪いと言っている。

そもそも下駄は畳の上で履くものではない。それでも新しく手に入れたものをちよつと履いてみたくなるのは人情と言うものであろう。履くと下駄の歯が欠けると言うから気持ちそがれる。

下駄の歯とヒトの歯を重ねて案じると縁起が悪い。ヒトの歯が欠けると身内に死人が出ると言う俗信がある。下駄の歯が欠けても不吉と思うのが普通であらう。

昔、田舎では死人が出ると、下駄を履いたまま畳の部屋から棺桶を担いで玄関に出た。畳の上で下駄を履くのは縁起の悪い行為であるのは、そのような風習に学んだに違いない。

下駄にまつわる俗信に、「下駄の鼻緒はなおが切れるのは不吉ふきつ」と言うのがある。

下駄を履いていて鼻緒が切れると不吉な予感がするのは、昔は子供でも感じ得た。

子供に限らず、下駄の緒が突然切れると誰でも途方に暮れる。緒の中でも鼻緒が切れると身動き出来ない。布切れでも持ち合わせていれば事なきを得るが、子供が布切れを常時持ち歩く訳がない。切れた緒を工夫して再生するしかない。緒を蘇らすには、ひと工夫もふたく

ふうもいる。

鼻緒の修繕がすべて首尾よく行くとは限らない。苦勞してこしらえた緒の結び目が小さくて、緒を通す穴から抜け出ることがある。そのときは最後の手段として、小さな棒切れを探し、それを鼻緒の結び目に通す。棒が穴に引っ掛かればしめたものである。

鼻緒の修復がうまく行っても、緒が短くなるので指が入りにくい。無理して入れると指が痛い。我慢して家路につくしかない。不平・不満を並べると罰が当たる。

下駄の緒が切れるだけでも不吉な予感がする。ましてや下駄の歯が欠けるとなると、不吉な思いは更につのる。

下駄の歯はヒトの歯になぞらえられる。ヒトの歯は齡の比喩。下駄の歯が欠けると、ヒトの死を予感しても不思議ではない。

人を噛む犬は歯を見せない

人を噛む犬は牙をむき出したりしない。人を陥れるような悪事をたくらむ人間は、決してそのような素振りは見せないものだと言っている。

人間の狡猾さを言い表わした譬えである。

英語のことわざに、「吠える犬は噛まない」と言うのがある。やはり、吠える犬より、口を閉ざした犬のほうが怖い

牙を見せない人間は要注意であるが、牙を現わさないのがすべて悪意の表われであるとは言いが切れない。優しさのため、牙を露わにしないこともある。

「獅子人を噛むに牙を露わさず」という言葉がある。

獅子は自分より弱い人間を襲うとき、牙は使わないと言う。秀でた才能を持つ人は、必要などきだけ自分の能力を発揮するものだと言う譬え。

「虎豹は其の爪を外にせずして噬むには歯を見せず」(『淮南子』)も、強いものは平素そのような素振りは見せないと言っている。

動物の牙は敵からわが身を守るための大切な武器。牙をむきだして威嚇しなければ自分の命を失う。

「牙を露わさず」などと、きれいごとは言っておれない。

「五十六歳という女の年齢が胸の中で牙をむいている」(『晚菊』林芙美子)。

人間も、ときには牙をむく。人間の「牙」は言葉の「棘」である。言葉は肉体を傷つけることはないが、心をぐさりと突き刺す。

人間が狡猾で、したたかな動物と言われても仕方ない。

歯亡び舌存
はほろ したせんす

固い歯は早く落ちてなくなるが、柔らかい舌はいつまでも残ると言う。

剛健なものは早く亡びるが、柔軟なものは最後まで生き延びることが出来ると言う譬え。老子が友人の病気を見舞ったとき、友人の歯はすべて抜け落ちていたが、舌は泰然として残っていたと言う故事による。

出典は『説苑』の「敬慎」。

「歯敝舌存」や「歯墮舌存」も同じ意。

物理的に強いはずの歯が、柔らかい舌より弱いと言う逆説めいた考え方が面白い。

物を食べるとき、誤って舌を噛むことがある。舌はいつも痛み堪えている。舌は歯に復讐することはない。そのうち歯は歳とともに抜け落ち、舌はいつまでも生き残る。もう噛まれる心配はない。

皮肉にも柔らかい舌が固い歯に勝ったのである。

「水滴石を穿つ」という言葉がある。

質量の小さい水滴であっても、加速されて石にぶち当たると、いつの日か石を穿つと言う。水滴と石を柔と剛に譬えているから分かりやすい。

人間の強さは肉体的には体力、精神的には気力で表される。体力は客観的に計測できるが、気力は主観的であり、計測不可能と言ってよい。

体力は必ずしも気力を凌駕しないのが興味深い。体力を剛とすれば、気力は柔と言ってよからう。

「柳に雪折れなし」と言うことわざがある。

柳の枝は細くて一見ひ弱に見えるが、雪が積もってもよくしなるので折れない。柔軟なものは堅固なものより強くて忍耐力がある、と言う譬えに用いてもおかしくはない。

「柔能剛制」(出典『三略』)も同じ意の言葉。

歯はいつも舌に負けているのではない。中国のことわざに、「歯は時に舌をかむことがある」と言うのがある。歯と舌は常に密接な関係にあるが、ときにはいがみ合うことがあると言っている。

舌は歯に噛まれて傷を負うことがあるが、やはり最後まで生き残るのは柔軟な舌である。

歯と歯

上下の歯の力強い噛み合わせを言う。

堅い約束の譬えである。

「男と男が歯と歯の切れ文」『歌舞伎』勝相撲浮名花触——中幕。

男同士で交わした堅い約束を破ったので、絶縁状を叩きつけた。

「歯と歯を合わす」や「歯と歯を番える」も堅い契を交わす意。

「歯と歯を合わせて約束したわたしも男が立たぬ故」『歌舞伎』日月星享和政談——五幕

や、「歯と歯をつげへた中だ物を」『洒落本』穴可至子）も、堅い約束を結んだ仲を言っている。

昔も今も世の中は約束事で成り立っている。約束を過信すると大けがをすることがある。約束の蔭で泣き寝入りする人があるのも事実である。だからと言って契りを結ばない訳にはいかない。約束事のない社会など想像することも出来ない。

「軽く諸う者は、信必ず寡し」は北床の詩人、林連の『省心録』にある言葉。軽々しく約束する人は信用出来ないと言っている。なかなか手厳しい。

「約をも頼むべからず、信あることすくなし。身をも人をも頼まざれば、是なる時はよろこび、非なるときはうらみず」『徒然草』——第二一段。

兼好法師も約束は当てにならないものだと言う。約束さえしなければ、少なくとも人を恨まなくて済むのは道理である。

古今を問わず、人は約束事に懐疑的のようだ。

「約束とパイの皮は破れる」は英語のことわざ。

西洋人も、約束はもういものだと言っているのだから。割り切っていて潔いが、それにしても楽天的である。

恥の名かくに爪ついで勘当被るに歯欠けず

いくら恥をかいても搔く爪は減らない。簡単に搔ける。勘当を食わされても歯を折ったりして苦勞することはない。何が起きても大したことはないと言う譬え。

「歯を折る」は、「骨を折る」に通じる。

「被る」は勘当を受けると言う意と、物にかぶりつく、すなわち食べるを重ねて言った洒

落。

「かく」も恥をかくと、爪で搔くを掛けている。

「搔く」と「爪」、「かぶる」と「齒」が縁語であるのも利いている。

それにしても、厚顔無恥で平然と生きる道楽息子を罵った昔の人の言葉は重い。

「恥ずること無きを之れ恥ずれば、恥無し」(『尽心』―上) は孟子の言葉。

羞恥心がないのは本当に恥ずかしいことだ。そう思うようになれば、自分の言動を反省し、羞恥を受けることはなくなるであろうと諭している。

今、めったに「勘当」という言葉を耳にすることはない。死語同然である。

勘当は親に背いた行いをしたため、親元から追放されることを言う。原因の多くは親の金を盗み放蕩したからである。

昔、勘当と言えば内証勘当が普通であった。家庭内で処理したのである。正式な勘当となると、役場に届け出て勘当帳に登録してもらわなければならない。勘当されると、決まって銚子に落ち着いているから不思議である。

親の脛かじる息子の齒の白さ

右の句は昔の落語『唐茄子屋』に出て来る川柳。

親の苦勞も知らずにしやあしやあと、あぶく銭を使って遊ぶドラ息子を皮肉っている。

親の脛を齧る白い齒も、親の金で買った齒磨き粉で磨き上げたのであろう。

齒磨き粉は当時、高価な贅沢品だった。

明眸皓齒

明るい瞳に白い齒。

美人の相を言い表した言葉である。

「明眸」は澄んだ美しい瞳。「皓齒」は白くて美しい齒。

出典は杜甫の詩『哀江頭』。

瞳が美しくて齒の白い美人のお方は、今どこにおられるのだろうか。彼女のさまよう魂は血に汚れ、安住するところさえないのであろうと歌っている。

「美人のお方」は安史の乱の最中に官兵に馬嵬で殺された楊貴妃。当時、帝都長安は安祿山の軍に占領され、杜甫自身も捕らわれの身であった。

「其日も、蒼ざめた顔を白く塗りかくして、帕子を首に巻付けたやうな女と、それから背のすらりとした、頬の薄紅い、微笑む度に優しい皓齒のあらはれるやうな、十八九ばかりの

娘とが来て居た」(『春』島崎藤村)。

作家は「皓齒」を美人の相として好んで用いた。

「朱唇皓齒」も美人をたたえた言葉である。唇は赤く、齒は白いさまを言う。これに美しい瞳が加わると、何と表現すればよいのであろうか。

齒は白ければよいと言うものではない。人工的に漂白された白い齒は不自然であり、血の通わない人形の齒にも劣る。

テレビで芸能人を見てみると、芸よりも齒の白さに目を奪われることがある。白い齒からこぼれる言葉にも重みがなくて、白けた感じが漂う。

齒は確かに見てくれの一つである。白いに越したことはない。しかし、「過ぎたるは猶及ばざるが如し」という言葉があるように、不自然な齒の白さは天然の齒の白さにはかなわない。

瑞齒含む

歳を取り、長生きすることを使う。

「瑞」はめでたいの意。「齒」は歳の譬え。「瑞齒」は長寿を表す言葉になる。

「松の齡」や「齒宿」も長寿や長老を意味する。

「惟光が父朝臣の乳母に侍りし者のみづはぐみて住み侍るなり」(『源氏物語』夕顔)。

朝臣の乳母であったものが、たいそう歳を取り暮らしていると氣遣っている。

「命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし」「命長ければ恥多し。長くとも、四十に足らぬ程にて死なむこそめやすかるべけれ」は、ともに『徒然草』の第七段にあるくだり。

生き物の中でも人間ほど長生きするものはない。命が長いと恥も多い。四十歳にならないくらいで死ぬのがよからうと言っている

紫式部の生きた中古と時代が違うとは言え、加齡の価値観が異なるのが興味深い。

近古の平均寿命は五十歳にも満たなかったにもかかわらず、それでも兼好法師は長く生きるのを忌まわしく思ったのであろうか。

今や人間の命は医学の進歩に伴い伸びた。予防医学がさらに人の寿命を後押しするであろうことも確かである。命は伸ばしてやったから、あとは自分の力で生きろと言われても、年老いて生活力のない人間は路頭に迷う。

「天下に達尊三有り。爵一、齒一、徳一」は、孟子の『公孫丑』にある一節。

世の中には、世間一般に尊ばれてよいものが三つあると説いている。一つは爵位、二つ目

は加齢、そして三つめは道德だと言う。

「爵位」は現代にそぐわないが、称号を尊ぶ者は今の世でも多い。

加齢の価値判断は難しい。歳の長さである量をよしとするか、それとも歳の質を可とするかで、価値観は分かれるであろう。

道德をわきまえることに今も昔も違いはない。いかなる時代でも、道德を守ることには十分な価値がある。

瑞齒ぐんだ長老を「齒長しちやう」とも言う。齒長はただの高齡者ではない。「齒徳しとく」と言う徳の備わった年長者でなければならない。徳のない歳を重ねると、歳甲斐がないと非難される。

凡人は、おちおち長生き出来ない。

齒が利く

「羽が利く」が「齒が利く」に転じて、齒が立つの意になったと言う。
俗に言う羽振りのよいことを意味する。

羽振りは世間で言う地位や勢力を表しており、権力や財力があると、「羽振りがいい」と見做される。

「頼朝公は舞台ではがきいても、樂屋で場が明ぬ」『滑稽本』樂屋方言――二。

役者は生身の人間である。舞台上で源頼朝の勇姿を演じて、樂屋に戻ればただの男。影が薄くて、貫禄もない。役者は職業であり、別人に見られても仕方がない。

羽が利くが、齒が立つに転じたが、もともと齒が立つは噛むことが出来るの意であった。ところが、さらに飛躍して、「自分の力が及ぶ」と解されるに至り、強い相手でも自分の力で十分に対抗できるという譬えになった。

「口ばかりむぐむぐしたつて齒が立つもんか」『滑稽本』浮世風呂――二。

子供の喧嘩に母親が出てきて、相手の子のばあさまに言った捨て台詞。

もぐもぐ言うばかりで要領を得ない。勝ち目はない。年寄はとしよりらしく黙って引っ込んでいると言っている。

「成ほど、綱木つなぎとやらは、わつち共が齒には合あやせん」『洒落本』甲斐新話。

綱木と言う女郎は自分達の手に負えない。われわれに似つかわしい女ではないと言っている。

「齒には合やせん」は、齒が立たないの意。

「齒が立つ」は、普通、「齒が立たない」と言った打消しの形を取る場合が多い。

飯のあらと嫁のあらは少しでも歯にかかる

「飯のあら」は飯に混じったもみがら。

「嫁のあら」は嫁の落ち度。

「歯にかかる」は、歯にものが物理的に引っ掛かると、心理的に気に掛かることを掛けて言った洒落。

飯に混じったもみがらと、嫁の落ち度はたとえわずかであっても気に障ると言うのである。

飯に紛れ込んだ異物ほもみ殻に限らず、何でも歯が素早く噛み当てる。歯は食物を細かく噛み砕くだけではない。食べ物の固さに応じて噛む力を瞬時に調節する。歯には感覚器としての機能も備わっているので、歯に引っ掛かる異物は物理的にいち早く感じ取ることが出来る。

「噛み分ける」と言う物理的表現は、心理的意味合いの描写にも当てはまる。

「石臼屋の藝助とて、何もかもすこしズン噛みわけた男あり」(『黄表紙』文武二道万石通)。役に立たない芸を少しずつ身に着けた男を言う。

「噛み分けた」は「芸を得た」の意。

何でも出来るが、何一つ精通したものが無いことを「石臼芸」と言う。石臼で挽いた粉はきめが粗くて何の役にも立たないと言うのである。

くろい歯へあてる小粒はほまちなり

『俳風柳多留』三十二篇

「くろい歯」はお歯黒。既婚婦人の印である。

「歯へあてる」は、何かに出くわすことの意。

「小粒」は一分金の異称で、一両の四分の一に相当する。

「ほまち」は、ほまち銭の略称。臨時収入や、へそくりなどを言う。

意地悪な姑であっても、ほまち銭が歯に掛かると、こころ豊かになり、嫁のあらなど取り沙汰しなくなるかもしれない。

ろくがつついたち はがた
六月一日に歯固めとして鏡餅を食べる

「歯固め」は長寿を願い、それを祝福する儀式。

「歯固め」の「歯」は齡の譬え。「齡」は年齢。

歯固めは昔、中国で執り行われていた習わし。正月に固い飴をなめて歯を丈夫にし、長寿を祝った。

飴はなめるだけでは歯は強くない。噛まなければならない。

「歯固めの祝^{いはひ}して、餅鏡^{もちかがみ}をさへ取り寄せて」(『源氏物語』初音)とあるように、わが国でも中国の風習をまねて、宮中では歯固めの儀式を執り行っていた。

中国では飴をなめ、わが国では餅を食べているのが興味深い。両者とも原料は米や餅米など、五穀の一つであるのは納得。

歯固めでは正月三が日に神前に鏡餅を備えて、押鮎、大根、瓜、猪や鹿の肉などを食した。栄養価の高いものを食べて齡を重ね、長寿を祈願したのである。

先の俗信では六月一日に歯固めを執り行い、餅を食べているのが面白い。

餅は冬に搗くものだと言う先入観がある。わざわざ夏に餅を搗いのかと言う疑問も生じる。実際には冬に搗いた餅を凍餅^{しみもち}にして六月まで保存していたのであろう。

「凍餅」は寒中で凍らせて乾燥した餅を言う。

歯固めでは鏡餅を凍餅にして供していたと想像される。

正月三が日の歯固めに用いる「押鮎」は鮎の頭の塩漬け。瓜は夏の野菜だから、漬物にして保存していたのであろう。猪や鹿の肉は乾燥させていたに違いない。大根は冬の野菜だから保存する必要はない。消化によい大根と一緒に食べる知恵は見事である。

歯固めでいつ誰が何を食べようと勝手である。固い物を食べて歯が強くなり、長寿につながれば理屈などいらない。昔の人は咀嚼により脳が活性化され、長生きできることを経験的に知っていたのであろう。

歯なしの大蛸^{おおだこ}

歯がなくてうまく噛めないのに、大きな蛸を食べようとする。分不相応なことをもくろむことの譬え。

「歯なしの骨^{ほね}だくみ」も同じ意。

歯がないのに骨まで丸ごと食べようとする。どだい無理な話である。

「七十餘歳をすぎて物見るには目がねを掛け向^{むか}歯^はまばらにして蛸^{たこ}の風味をわすれ、かうの物さへ細^{こまか}におろさせ」(『好色一代女』一一)。

歳を取ると目が不自由になるだけではない。前歯さえ抜けて疎らになり、蛸はおろか、香の物さえ小さく刻まなければ食べられないと嘆いている。

歯は一枚欠けても不自由である。ましてや歯を全部失うと、物を存分に食べることが出来ない。不自由するのは食だけではない。言葉を発するときも苦勞する。どの歯が欠けても正しく発音できない。前歯や奥歯にはそれぞれの役割があることを思い知らされる。

歯が抜け落ちると、体の一部が欠けるだけの話では済まされない。心にも深刻な影を落とす。

「全部がだめになるまでに自分が死ぬか、そうでなければ、総入れ歯をして不自由な思いをしなければならぬ。もともと私は歯性はよかつたのに、いつごろか、一本の齧歯に悩むようになった、それがしだいに増えて行つたのだ」『大籤』武田麟太郎。

歯の欠落は入れ歯で補うことが出来るが、必ずしも心身を満足させるものではない。親の恩と同じで、歯を失つたとき初めて歯のありがたさが分かる。

「パンがあるのにそれを食べる歯がないものの哀れさよ」は、ルーマニアにあることわざ。目の前に美味しい食べ物があるのに、それを食べる歯のない悲しさを皮肉っている。力不足のため、目前の成果を上げることが出来ないことの譬えでもある。

歯は力の比喩。

歯がなければ大蛸はおろか、パンも口にすることが出来ない。歯があれば何でも噛み砕くことができる。何のもくろみもない。分相應の力で事足りる。

歯節がたたん

歯が立たない。勝ち目のないことを言う。

「歯節」は歯茎の意であるが、歯を意味することもある。

「歯節にまかせて齧りをるじゃ」『歌舞伎』お染久松読販）は、仰々しく言うため、歯の力を借りている。

歯節は歯茎や歯だけの意でなく、言葉の譬えにもなる。

「歯節へ出す」が「口外する」と解されるのはそのためである。

「今日の事重てはぶしへも出さば、命が無いぞ」『浄瑠璃』国性爺後日合戦―二）と言われたら、死んでも口に出せない。

昔は噂のことを「口歯」と言った。「口歯」は「口端」とも書く。

「腹を立くらいなら、今迄人の口歯にかゝつて来わしねへが」『洒落本』傾城買二筋道）

は、人の噂にのぼらなかったと言っている。

「歯が立たない」はどちらかと言えば、後ろ向きの言葉の感がある。遠い昔の人は前向きに「歯は立せねへ覚悟でさせる嫁入りだが」『人情本』春告鳥―五〕と言った。

「歯は立せねへ」は文句を言わさないの意。

相手として申し分ないとき、「歯に合う」と言う。自分が相対するものより劣っている場合は、「歯が立たない」となる。歯は言葉も噛み分けるすぐれものである。歯が力の象徴であるのは不思議なことではない。

下^{した}歯を入れる

女房をもらうことを言う。

江戸時代、庶民の間で、妻を迎えることを「下歯を入れる」と言った。

『ははあ、そんならお前が噂の高い人丸お六どのか』『兄貴、いい下歯を入れなすつたの』
『歌舞伎』吾嬬下五十三駅―四幕〕。

「下歯」の語源は「下^{した}端」にあると言う。下歯は「上^{うわ}歯」の対語とも取れるが、語感が「下^{した}端」を連想させるから印象が悪い。「上歯を入れる」と言う成句もない。上歯を夫に見立てると、上下の歯は一对をなし、夫婦関係が成り立ってもよいはずだ。

下歯を下端とみなすと、下端は物の下を意味するので、やはり都合が悪い。女房を卑しめていると誤解されかねない。

下端には「おとなしく応じる」と言う意があることを知ると救われる。

上の歯と下の歯を比べると、男と女の違いがあるように、異なる点が多い。中でも前歯の形の違いは象徴的である。下の前歯は上の前歯より小さくて、しかも内側に位置している。上の前歯を夫に見立てると、下の前歯は控えめの妻の姿に重なる。下から上を支えているように見えるといえ、言い過ぎであろうか。

下の歯が妻を連想させるのは歯の形や、その位置だけではない。噛むときの歯の動きにもある。物を食べるとき顎をせつせと動かすが、そのとき動くのは下の顎である。下の顎の歯が上下に忙しく動いても、上の歯は全く動くことはない。挺でも動かないと言ってよい。上下の歯の働きぶりを比べると、昔の夫婦関係を思わせる。

上の歯と下の歯が夫婦に譬えられるには訳がある。両者が互いに噛み合うのがあるべき姿。上下の歯がうまく噛み合わなければ、互いに十分な力を発揮できない。上下の歯が噛み合うのは、夫婦が円満に支え合うことにつながる。

今は歯をもって夫婦の関係になぞらえることは許されない。古い言葉を使うと差別用語になる。「下歯を入れる」など男は口が裂けても言えない。そのうち妻は上歯を夫に見立てて、「上歯を抜く」と言い出すかもしれない。

年齢傾く

歳を取る。老いの身と言う。

「年齢を重ねる」も同じ意。

「ただ過ぎに過ぎるもの帆かけたる舟。人の齡。春、夏、秋、冬」(『枕草子』一二六〇)。
あつという間に過ぎ去ってしまうものの一つに、人の齡が入っている。遠い昔でもそう思ったのであろう。

清少納言が『枕草子』三巻を綴ったのは、今から一〇〇〇年以上も昔の平安時代である。当時が今のように多忙な時代であったとは想像しにくい。時の流れを速く感じるのは時代に関係なく、人間の持つて生まれた感性によるものかもしれない。

『枕草子』の冒頭にある「春はあけぼの。やうやう白くなり行く、山ぎは少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏は夜。月のころはさらなり。闇もなほ螢の多く飛びちがひたる」は、いかにもおおらかで静かな季節感がある。時の流れの速さなど微塵も感じさせない。

人間の時間に対する感覚はあやふやである。状況と心境により変わりやすい。四季の時の流れは同じであるのに、ある時は長く、あるときは短く感じる。

「人生五十年」と言われて久しい。昔から人の一生は短いものだと思われていたのである。今では平均寿命は五十歳をはるかに超え、人生一〇〇年も夢ではなくなった。

歯科界でも人間が八十歳まで生きるのを当たり前のことと考えた。八十歳まで自分の歯を二十本残そうと言う、「八〇二〇運動」なるものを唱えている。長寿を見据えての政策であらう。

いくら寿命が伸びても、時の流れはいつの世でも速く感じるようだ。歳を取るとなおさらはやい。

あつという間の人生だったと顧みるのは凡人に限ったことではない。古代ギリシャの医聖ヒポクラテスも、「芸術は長く人生は短い」と言っている。

若いからと言って油断していると、あつという間の人生になりかねない。目標達成のためにも刻一刻を大切に、歯を噛みしめるような思いで年齢を重ねて行くのも一考ではなか

ろうか。

齒を没す^{ぼっ}

「齒を没す」は、齡の譬えの齒がなくなり、人の一生が終わることを言っている。齒と年齡が密接な関係にあるのは、「齡」の字面からも察しがつく。

昔は齒の喪失と寿命が一致していたのであろう。歳と共に齒は抜け落ち、すべての齒を失うとき、人の命も尽きていたに違いない。欠けた齒を補う技術のない時代のこととは言え、あまりにも現実的な事態である。今は人工齒で齒の欠損を埋める技術があり、齒の脱落がすべて人の死につながるものではない。

「齒を没す」は人の生涯を表すだけの言葉ではない。齒が抜けることを意味する場合もある。

『漢語林』（大修館書店）によれば、「没齒」は齒が抜け替わる年。男子は八歳、女子は七歳とある。

齒が抜け替わる年と言っても、乳齒がすべて永久齒に替わる歳を言っているのではあるまい。乳齒は生後六か月頃から生え始め、二、三歳になると全ての乳齒は生え揃う。せっかく整った二十本の乳齒も、六、七歳頃に達すると永久齒と交代するため抜け始める。乳齒は離乳に備えて生えるが、わずか六、七年で姿を消すのは実に寂しい。

『漢語林』では没齒は齒の抜け替わる年としているが、その年が男子は八歳、女子は七歳とあるのが興味深い。

漢民族の乳齒の脱落時期は現代日本人より遅いように思われる。これは満年齢によるか、数え年によるかの違いによるのであろう。わが国では満年齢の六、七歳頃になると乳齒は抜け始める。それにしても、古代中国人の乳齒の抜ける時期に性差があるのは注目に値する。

没齒という言葉は乳齒と永久齒の寿命から生まれたのかもしれない。乳齒を失うのは命の始まりであり、永久齒の喪失は命の終焉を意味するのであろう。

齒はやはり、命とは切ってもきれない関係にある。

おわりに

齒とことわざについて考えるきっかけになったのは、外山滋比古先生との長い間におよ

ぶ文通の中での、先生のご助言によるものだった。歯についてのことわざを歯科の立場で味わってみてはどうかと勧められた。ことわざも日本語のものだけでなく、英語のものも調べると面白いものになるのではないかとのご示唆も頂く。日本語のことわざは『ことわざ大辞典』（小学館・昭和五十七年三月三十日発行）を底本にしが、英語のことわざは英国で出版されている『オックスフォード英語ことわざ辞典』が役に立つであろうとのご助言も賜る。

外山滋比古先生から日本語のことわざ五十編と英語のことわざ五十編を準備すると、フランスの取れた面白い内容になるだろうとのお励ましのお言葉も頂いた。

英語のことわざに取り組むうちに、並大抵の英語力では読み解くのは難しいと判断したが、歯学の知識を頼りに何とか立ち向かうことが出来たのではないかと思っている。英語のことわざの多くは古い英語で書かれており、難解な言葉を十分に解釈することは出来なかったが、得るものがなかった訳ではない。歯のことわざには、シェイクスピアの作品に見られるものが多くあるのを知ったのは望外の収穫だった。中でも『から騒ぎ』の第五幕第一場で、リオナードがアントーニオと交わす台詞、「歯の痛みは哲学者でも我慢できない」はあまりにも有名な言葉である。

ヨーロッパには他にも、「痛風と歯痛ほど痛いものはない」や、「歯痛があると、頭痛を忘れる」などと言った、歯の痛みを取り上げたことわざがあるのは興味深い。歯の痛みは古今東西、万人の悩みであることをことわざは包み隠さず吐露していると言ってよからう。

歯は体の中で最も小さくて、もつとも固い器官。色は白色。歯は言葉を発する訳ではないが、比喩や身体言語としては言葉以上の表現力を有している。わが国では歯の脱落は不吉な予兆として忌み嫌われるが、西洋では歯は力の象徴であり、歯の欠落は体力や精力の減退を意味する。歯の欠損はわが国では唯心的に、西洋では唯物的に思考されると言ってもよいかもしれない。

二〇二四年

大庭 健